

するとクリック・ノイズを低減することができる。

多くの場合、プリアンプは(図3)のようにアウトプット・ジャックのすぐ手前に入れられる。この方法はほとんどどんな回路のエレクトリック・ベースにも応用可能であり、ボリュームを操作した時の音量変化、音質変化の感じは従来のままとなる。つまりボリュームを絞っていくと若干高域が落ちてマイルドな音質になるという、パッシブ・サーキットの特徴は残るわけだ。

しかしせっかくプリアンプを内蔵するのだから、ボリュームを回してもほとんど音質が変わらないようにしたいという向きもあるだろう。そんな時ベースがマスター・ボリューム式であれば(残念ながらジャズ・ベースはダメ)、(図4)のようにプリアンプをボリュームの前に入れるという方法もある。

プリアンプの出力側はインピーダンスが低いので、ボリュームには25K ~ 50KΩのものを使用する。したがってプリアンプのバイパスは諦めることになる。(図4)の中でパッシブ・トーンはプリア

ンプの前に付けられているが、このほうがトーンの効きが良い。しかしプリアンプにトーン・コントロール機能があれば、普通はパッシブ・トーンはいらないだろう。

プリアンプは電池で動作する。したがってどこかに電源スイッチを付けないと、ベースを使用していない時にも電池が消耗してしまう。実際、初期のミュージックマン・ステイングレイ・ベースにはプリアンプの電源スイッチが付いておらず、常に電池が消耗する状態であった。

現在ではほとんどの場合、ジャックが電源スイッチを兼ねていて、プラグを差し込んでいる時にはプリアンプの電源がON、プラグを抜いておけば電源はOFFとなっている。構造的にはステレオ・ジャックを使用し、電池のマイナス側をアースに落とすかどうかでON/OFFしている(P73.“ジャック”参照)。またスイッチ回路付きのジャックを使用している例もある。

図3: 一般的なプリアンプの挿入位置。

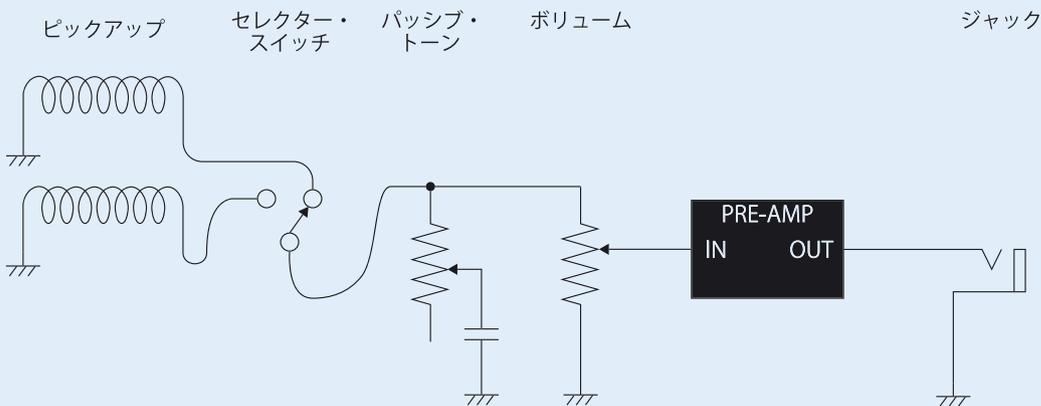


図4: ヴォリュームの前にプリアンプを入れる配線。

